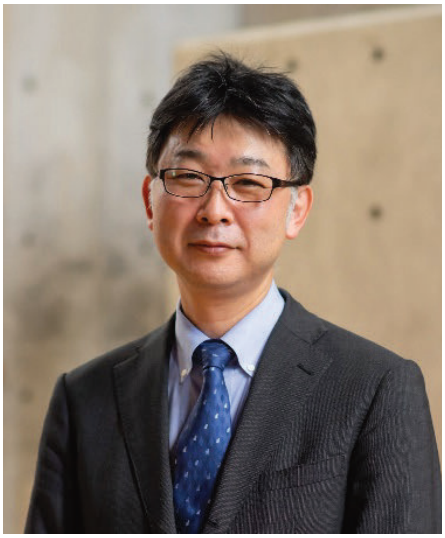
発行：関東学院大学国際文化学部比較文化学科　〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1 TEL.045（786）7056

巻頭言

“To know”, “to do”, “to be”

比較文化学科長　高井　啓介



新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。新しい学びの場で始まる新しい生活、いまみなさんの人生は希望に満ち溢れていることと思います。この４月から国際文化学部も八景キャンパスに移ってきました。私自身も、そしておそらく他の先生方も、八景キャンパスでは新入生のような気持ちですべてが新しく思え、みなさんと一緒に早くキャンパスに慣れ親しんでいきたいと思っています。

ところで、みなさんは新渡戸稲造という方をご存知でしょうか。樋口一葉にバトンタッチをする以前、ちょうど20年前まで、五千円札には彼の肖像画が描かれていました。新渡戸は江戸時代の終わりごろ現在の岩手県盛岡市に生まれ、明治時代になって札幌農学校に学び、「Boys, be ambitious！」でよく知られるクラーク博士の影響を受けてキリスト教徒になりました。彼は日本最初の農学博士でもあります。第一高等学校（のちの東京大学）や東京女子大学で教えた教育者としてもよく知られ、のちに国際連盟事務局次長として世界平和のためにも活躍した人物でした。

タイトルにある“To know”，“to do”，“to be”は、この新渡戸稲造が第一高等学校の校長時代に語った学生にとって大切な三つの事柄です。彼の教え子であった南原繁によれば、新渡戸はこの三つの事柄に段階性をつけて、“To know”より“to do”，“to do”より“to be”と学生に伝えていたといいます。これを日本語で言い換えると、「知ること」よりも「成すこと」、「成すこと」よりも「あること」「なること」が大切である、ということでしょうか。

「知ること」とは知識・技能の習得です。比較文化学科では、日本と世界の文化、歴史、思想、宗教に関心を寄せて知識を獲得し、それらを比較しながら多文化の共生について考え、異文化理解を深めていくことができます。資格につながる技能も学科での学びの対象です。こうして、なによりもまず、大学の根本的な学びとして「知ること」に対する渇望を持ってください。ただ、知識を得るだけにとどまらないで下さい。みなさんには、その知識をどのように「成していくか」を考えてほしいと思います。知識を何のために活かそうとするのか、知識を役立てて自分の生きる社会のなかで何を成し遂げていくのか、多文化共生社会のなかで文化と文化の間をとりもつプレーヤーとして、その知識を行動に結び付けて行ってほしいのです。新渡戸先生風にいえばそれでもまだ不十分。何よりも、“to be”、つまり自分がどのような人「である」べきか、どのような人「になる」べきかということをより優先して考えていってほしいと思います。みなさんには、大学の学びで獲得した知識を武器に社会のなかの問題・課題を解決できるように備えていってほしいのですが、その問題・諸課題を自分事として捉え直すことができるようになるためにも、しっかりとしたぶれない「自分」を確立していっていただきたいと思います。新渡戸の教えは、「新しくされた人間として隣人と社会に奉仕できる人間を育てる」という関東学院の校訓「人になれ　奉仕せよ」ということばにも呼応するところがあると私は思います。これからはじまる大学生活、まず何よりもどのような自分に「なり」たいか、どのような自分で「あり」たいか、どのような自分を理想とするか、そのことを常に考えていっていただきたい、そう思っています。みなさんが、そのような人間像のモデルを、大学の学びの中においても、大学で出会う人のなかにおいても、探していくことができる、見出すことができる、そう信じています。

ゼミ連インタビュー

比較文化学科ゼミナール連合の学生諸君が今年度を以てご退職を迎える佐藤茂樹先生の研究室を訪問しました。佐藤先生は1986年に着任して以来、37年間にわたり比較文化学科に貢献してきました。大学生活の思い出やご専門とされる研究のこと、色々と尋ねてきてくれました。

佐藤茂樹先生に聞く

Q：なぜドイツ圏について研究しようと思ったのですか。

A：研究対象が自分と一番遠いと感じたからですね。やっぱり、自分がこれまで関わってきたことのない世界とか、そういうものに関わってみたいと思いますよね。自分が一番好きなことでつまずくと後がないでしょう？だから、自分が覗いたことがなくて、自分と対極的な世界を覗いてみたい。それなら失敗しても別に、「こっち（別方面）にもまたあるや」と思えるし、それを踏まえてドイツになりました。

それから、ドイツを勉強するためにはドイツ語をやらなくちゃいけないでしょう？僕はあまり几帳面ではないんですよ。だから外国語をきちんと積み上げていくといった作業は非常に苦手だったんです。ですが、苦手なものこそ克服しておけば、それを将来に繋げていけるかもしれないと思いました。文化なんて非常に抽象的です。「これがいい」「あれがいい」って誰がどう考えるか、わかりません。でも語学ってある意味で技術でしょう？だからそういう職人的な部分をぜひ自分で身につけておきたいなと思ったんです。

Q：ドイツ圏を研究していて面白いと感じたことはどのようなことですか。

A：面白いと感じたことは、自分をできるだけ顧みて、客観視してそして先に進もうとするそういう精神が18世紀あたりのドイツに芽生えてきたということですかね。そこが一番私たちと違うところで、面白いなと思いましたね。

Q：本大学で教授をしていて、印象に残っていることはありますか。

A：一番印象に残っていることは、この学校での教授生活が「お風呂に入っている」ようだったことですかね。ゆったりとしていて、気持ちが落ち着いて、変に突っかかったような気持ちが取り払われていく、安らいでいくような、そんな雰囲気だったことですかね。

Q：今年で定年退職をされるということですが、この先やってみたい研究などはありますか。

A：やりたい研究はたくさんありますけど、最初になりたいのは「ギタリスト」ですね。今、ギターの学校に通っていて３年間続いたので、是非とも恥ずかしくないように人前で演奏できる人になりたいなと思っています。

Q：本校の良いところはありますか。

A：学生の皆さんも職員の方々もおおらかな感じがしますよね。特に比較文化学科の場合、人によって専門が違うでしょう。ですから、ある人がやっていることを気にするといったような変な競争意識がなく、それぞれのやっていること（研究）を尊重しあって共存しているといったところがよかったですね。ただ、よかった反面、それがやっぱり色んな意味で自分自身に甘くなってしまうこともあります。

学生さんに関して言うと、他所の学生さんと比べて、「本当は自分はここにいるべきではないのだ」「自分は別のところなんだ」みたいに、自分のいる場所を嫌っている学生が関東学院には少なくて、自分がいる場所を受け入れて、そこで自分の楽しい世界を作っていこうと頑張っている。そんなところがよかったかなと思いますね。

Q：比較文化の研究を通して学生たちになってほしい将来像などはありますか。

A：具体的にこういう職業とかこういう人物とかではなくて、もう少し積極的に社会に露出する人間になって欲しいかなと思いますね。なんでもいいので、自分の持っているものを土台にして社会に露出して欲しい。「自分はここまでで良いのだ。」というところが関東学院の先生もそうだし、学生のみんなもそうだと思うんですよ。あまり自分の範囲を最初から決めないで、「自分はここに出ていくんだ。」と。昔ある政治家が「２番じゃダメなんですか？」と言っていましたが、２番じゃダメなんです。金メダルを取ってください。

集中講義「外からみた日本Ⅱ」について

本学科教員　鄧　捷

冬の集中講義「外から見た日本２」は２月１日(水)～７日(火)にオンライン形式で開催されました。授業を担当したのは北京第二外国語学院の張雅意先生です。張先生は国際関係、日本外交文化、異文化交流などを専門とし、旅行を趣味としています。日本各地を旅した時の写真は、2016年に中国人民網と日本国家観光局が主催した「VISIT JAPAN 中国人訪日観光写真コンテスト」で三等賞を獲得したほどの日本通です。授業はまず、日本滞在中に撮影した映像、写真などを素材にし、中国人の目から見る日本の姿を紹介し、その上、映像資料に基づき、中国人から見た日本の物質的生活（衣食住）と精神的生活（自然観、人生観、価値観）のあり方を取り上げ、身近な他者・中国の視点から日本社会を考えさせることにしました。また、日中の社会学者の対談映像を見せることを通して､「異文化理解の可能性」や「信頼」の比較研究をテーマにして学生たちと討論し、授業の最後に、今の北京第二外国語学院の在学生が書いた日本文化についての感想文を取り上げ、両国の若者たちが時空を超える交流を促しました。

授業に参加した学生の感想をいくつか抜粋して紹介します。

「外から見た日本を受講して自分は日本の文化について知っている気になっていただけなのだと感じました。日本に住んでいるからこそ日本の文化について深く知ろうとしていなかったのだと感じました。今回の講義では日本の文化について学びなおす機会になりました。…（中略）…中国と日本の自然を重視する考えが非常に似ていると感じました。特に中国と日本の建築における自然に合う空間を求めているという部分はほとんど同じ考えだと思いました。また、食事の面では中国も日本も地域によって味付けや形が異なる部分は共通しており中国と日本では他にも様々な共通点があるのではないかと感じました。そこでなぜ中国と日本という異なる国で同様の価値観が生まれるのか興味深いと感じました。」（淺野勇斗）

「私は中国について深く学んだことがなく､また中国語を履修していないので、授業であまり中国という国に触れる機会がなく、あまり知識はなかったのですが、今回の講義を受け、衣・食・住の文化や建築物文化など様々な内容を学びました。

その中で１番興味深かった内容は、やはり身近な、中国の食文化です。食文化に関してはある程度の知識とイメージを持っていたのですごく興味が湧きました｡中国の食べ物と聞くと「辛いもの」「色や味の濃い食べ物が多い」というイメージを持っていましたが、中国と日本の食文化の特徴を比較しながら考えると、違いが明確で授業を受けていてとても面白かったです。」（伊丹真菜）

講師の張雅意先生が撮影した日本 ――「力合わせ」

中国語HSK資格試験対策講座を開催しました

本学科教員　菅野　恵美

比較文化学科では、中国語検定試験 HSK（漢語水平考試）のための対策講座を開設しました（2023 年２月８日～14 日、土日を除く５日間実施）。HSK は中国政府公認、世界共通基準の資格であり、留学・就職活動に大変有利です。

今年度は16名の学生が参加し、それぞれ HSK２級から４級合格を目指して受講しました。講師は李維濤（リ　イトウ）先生が担当しました。また、中国常州大学からの留学生・付効羽さんが助手として参加しました。

今年も講座の評判は上々でした。以下、参加者の感想を紹介します。

中国語資格試験対策講座に参加して良かったと思います。春休みに５日間も無料で指導してもらえて、中検を受ける人にとっては得でしかないです。個人的には自分一人で勉強するのが難しいリスニングをさせてもらえるのがとても有難かったです。また、過去問を解いた後は詳しい解説があるし、一緒に講座を受ける友達もいるので、お互いに教え合ったりしながら勉強出来ます。また、単語をまとめたプリントなども配布してもらえるのも良かったです。

（１年　藤田咲来）

この講座では HSK２級と３級の内容を主に扱っていました。最初は不安でしたが、基本的なことから徐々に勉強していったので安心して受けられました。２日目の半日まで２級の内容を扱っていましたが、３日目からは３級の内容を勉強しました。１日目は１年生の時に学んだ事を復習したり、語彙を増やしたり、実際に過去問を解いてそれを先生が解説したりしていました。

１年生の時に授業で取り扱わなかった文法や語彙を学ぶことができるので HSK に向けての勉強も捗るし、２年次の中国語の授業に向けての予習にもなった気がしました。

（１年　瀬戸萌々香）

「映画と神奈川・横浜」を終えて

本学科教員　碓井　みちこ

12月26日と２月6･7日に、集中講義「映画と神奈川・横浜」を実施しました。横浜を物語の舞台かつロケ地とした映画・テレビ作品は多数存在します。今年度の当授業は、横浜の街を物語の展開にうまく活用した作品、さらには当時の世相や風俗も含め、在りし日の街の姿を克明に記録した作品として、『霧笛が俺を呼んでいる』（1960年）、『天国と地獄』（1963年）、そして『あぶない刑事』シリーズ（1986～2016年）に焦点を当てました。教室の講義では、映画・テレビ産業史の観点を取り入れつつ、当時の映画会社もしくはテレビ局・番組制作会社における製作体制について簡単に解説した後で、個々の作品について、その画面構成の特徴や演出スタイルなどを詳しく見ていきました。そして、最終日の２月７日には、横浜スタディ・ツアーを行いました。ツアーのコースは、当授業の共同担当者で、日本史の中でも産業考古学をご専門にされている中川洋先生に計画していただきました。作品が撮影・製作された当時と現在では、同じ場所が果たしてどのように変化したのか（あるいはしていないのか）、実際に街を歩いて、受講生と共に確かめていきました。

教室の講義だけでなく、横浜スタディ・ツアーがあったことで、映画や街の歴史に対する理解がより深まったと感じてくれた受講生が多かったようです。中川先生は、過去の産業や都市計画の痕跡を現在の街の中に探る上で、かつてその地で撮影された映画には、非常に多くのヒントが詰まっているとおっしゃいます。中川先生にご協力いただいたことによって、映画という具体的な対象に即しつつも、より広い視野で、街に残る人々の営みの歴史をたどる授業にすることができたのではないかと思っています。

中川洋先生（左から３番目）の解説を聞く受講生

ゼミナール連合活動

ゼミナール連合企画「服飾の比較文化」参加学生報告

初耳という人もいるかと思いますが、比較文化学科では毎年、所属ゼミを横断した２年生以上の学生の交流団体「ゼミナール連合」（以下、ゼミ連）を作り、学生主体の課外活動を実施しています。今年度ゼミ連のまとめ担当となった私（小滝）と鄧捷先生は、ゼミ連の学生たちといくつかのミュージアム展示を観て、そこに「比較文化」的な問題を発見する研修ツアーを実施しました。企画全体のテーマは「服飾の比較文化」で、訪れたのは、いずれもファッションに関連する展示です。2022年10月23日（日）に渋谷区立松濤美術館で「装いの力―異性装の日本史」を、12月17日（土）に東急渋谷 Bunkamura ザ・ミュージアムで「マリー・クワント展」を観たほか、一部の希望者は私と一緒に松濤美術館の「ビーズ展－つなぐ　かざる　みせる」も鑑賞しました。

以下に掲載するのは、これらの研修ツアーに参加した学生の展示評です。各自が展示から感じたこと、ファッションに関する展示を比較して考えたことなどを書いてくれました。いずれも力作ですが、これを読んだ他の学生の皆さんにも、ゼミ連の活動に関心を持ってもらえたら幸いです。

（本学科教員　小滝陽）

２年　山本　美宇

「装いの力－異性装の日本史」展では「古事記」に残されている異性装の歴史から現代の異性装まで、日本の異性装の歴史に関する展示を鑑賞しました。

特に印象に残っている展示は以下の３点です。まず、「つき百姿　水木辰の助」は男性が鮮やかな青色の振袖を着ている絵画です。綺麗な振袖と男性が振袖を着て異性装をしているという点で印象に残りました。次に、「東京日比新聞969号」は明治時代の異性装の取締りの様子が描かれている新聞です。明治時代は違式詿違条例（いしきかいいじょうれい）という条例によって異性装が禁止されていましたが、この展示を見ることで、実際に異性装がどのように禁止され取り締まられていたのかを想像することができ印象的でした。そして、「東京名所三十六戯撰　隅田川白ひげ辺」は異性装をした男性たちが川辺でにぎやかに盛り上がっている様子が描かれた錦絵です。この作品は異性装が禁止されている明治初期のものです。しかし、絵に描かれている男性たちは異性装が禁止されていても、自分たちが望む装いをして楽しそうにしているように見えました。自分のしたい装いや自由な装いをすることで自分らしく振舞えるのではないかと感じ、自由な装いには自分らしさを表現する力があると感じました。

現代では異性装やジェンダーレスファッションなどが広まっており、偏見や差別的に見られることも徐々に減り、理解もされやすくなってきていると思います。しかし、今回の展示で現代に至るまでの異性装の歴史を知ると、異性装を禁止していたり偏見や差別の目で見られたりすることが多々あったことを認識しました。ところが、展示を鑑賞した限り、異性装の禁止や差別があった時代でも、自分の着たい服を着て自由な装いで生活している人もいました。そのため、装いには自分の着たい服を着て自分らしく生きる力があるのではないかと感じました。また、異性装の制限や差

別があったのにも関わらず、異性装の歴史が資料に残っていることは貴重であると感じ、同時に貴重な資料を鑑賞することができたことはとても有意義だったと感じました。

異性装やその歴史については、比較文化学科でのジェンダー問題や文化、歴史などの学びに通ずる部分があると思うので、今回の展示の鑑賞で感じたことや展示から得た学びをいかしていきたいと思います。

２年　丹澤　仁那

今年度のゼミナール連合の活動で、企画展「装いの力―異性装の日本史」展と、「マリー・クワント」展を鑑賞しました。どちらの展示も私たちの生活に欠かせない服に関係している展示でしたが、異性装の日本史では生まれ持った性役割とは異なる服装をする人々の歴史についての展示であったのに対して、マリー・クワント展では「ミニの女王」と呼ばれたマリー・クワントがデザイナーとして確立してきたファッションについての展示になっていました。

異性装の展示では、古事記に残っている異性装の歴史から漫画ベルサイユのばらで描かれている異性装など幅広い時代の異性装について取り扱っていました。端午の節句で男児の健康や成長を願って飾られる五月人形のモデルになったと言われている人物が、甲冑を身に纏った女性であったり、女性の着物に身を包んだ男性が人々を楽しませるための娯楽として舞台に上がったりなど、日本には異性装について様々な歴史や記録が残っているのだと展示を通して知ることができました。また、日本では宗教的に異性装が禁忌になっていなかったこともあり、古くから性の枠組みにとらわれない衣装や催し物などが行われていたように見えました。

一方のマリー・クワント展は女性服に焦点を当てた展示内容であったため、異性装の展示よりもより親しみやすさを感じました。ミニスカートにロングブーツを合わせたコーディネートやジャージ素材のワンピースなど現代にもつながるファッションの原型を見ることができました。マリー・クワントは、それまで存在していたジェンダー観や社会の階層に捉われることなく、手頃な価格で服を販売したことによって女性がファッションを楽しむことのできる世界を作り出したのだと感じました。

今回の二つの展示を通して、服は簡単に自分を表現することのできる一種のツールであると感じました。多様性が重視される現代においてこの先、ファッションはさらに変化していくと考えました。ファッション以外にも、自分を表現できるツールはたくさんあると感じているので、周りの目や意見に左右されずに様々なものを取り入れて自分の視野を広げていきたいです。

３年　斎藤　架子

12月17日にBunkamuraザ・ミュージアムで「マリー・クワント」展を観覧し、ミニスカートブームを生んだ革新的デザイナーであるマリー・クワントの生い立ちから、実際に作った洋服などを年代順に見ることで、ファッションからその年代のロンドンの様子や、女性の地位などを窺うことができた。マリー・クワントというと、ブランドロゴであるデイジーマークの印象が強く、財布やポーチなど百貨店でよく見かけたりしていたが、

それだけではなく、洋服を始め、コスメティック、デイジー人形なども販売されていて、ライフスタイル全般に幅広く展開していることが分かった。

特に今回の展示を通して、「もっと自由に、自分らしく」というメッセージを唱え、それまでの時代や男性の求める理想に囚われず、軽くて斬新なデザインを世の女性に向けて送り出し、女性の振る舞いや考え方にも大きな影響を与えたというところが非常に印象に残った。ジェンダーや階級意識などのステレオタイプに果敢に立ち向かった姿にはとても感銘を受けた。豊富なカラーバリエーションや自由なデザインの衣装は見ている私達をもワクワクと楽しませるものであった。私達は現在、自分の着たいものを自由に着ることが出来ているが、そこにはマリー・クワントのようなデザイナーの存在があり、性別の役割や社会階層に囚われない、若い女性のためのデザインの発信に情熱を注いだことが、今に繋がっているのだと改めて思わされた。

同日「ビーズ展」も訪れた。これまでのビーズという自分の中に合った概念が崩される展覧会であった。ビーズと言うと丸い綺麗な石に糸を通して繋げたものだと思っていたが、どんなものでも穴をあけ、紐を通せばビーズであり、人の歯や虫を繋げて作られたものもビーズとして展示されていて衝撃を受けた。普段展覧会に行くことがないので、今回の研修を通して、展覧会に行き、色んな作品と出会うことで、自分の感性が磨かれたと思う。また学年を越えての交流も図れたのでいい機会であった。

２年　市川　麻衣

初めに、マリー・クワント展へ行きました。マリー・クワントと聞くと、黒いお花の印象しかありませんでしたが、今回の展示会を見て、女性である私にとって切り離せない存在ではないかと考えました。私は時々、なぜ普段着や就活のスーツなどの女性服はとても動きにくく、使いにくいのだろうと考えることがあります。実は、マリー・クワントも同じことを考え、彼女の手によって女性の服は使いやすいものへ変わっていったと学びました。私たちがズボンを履けること、ショートカットがおしゃれとしてあるのは、女性服に男性服の要素を取り入れ、動きやすい服を開発したマリー・クワントの活躍があったからなのだと知ることができました。もし彼女がいなかったら、おしゃれは富裕層が楽しむだけのもので、私たちは今でも身軽にオシャレを楽しむことができなかったのかもしれません。

また、私は着たい服を選ぶときに、自分に似合うのだろうか、周りに何か言われないだろうかと気にすることがあります。しかし「洋服はなりたい自分を表現するための手段」というマリー・クワントの言葉を聞いたときに、自分自身に固定概念を押し付けて苦しめていたのかもしれないと気づきました。洋服が自由になったこの時代を、もっと楽しむべきだと感じました。

同じ日に行ったビーズ展では、ビーズの歴史や文化を現物を通して知ることができました。ビーズと聞けば、子供が遊んでつけるもの、そんなイメージでした。入ってみると、医療のプラスチックごみを使って、子供のおもちゃ目的で作られたビーズ、本物の蜂の頭が何個も糸に通されてアクセサリーになっているもの、人間の歯に糸を通してビーズにしたものなど、想像をこえるビーズの表現がいくつもありました。それらを見ながら、なぜ人はビーズを作るのだろうか、これらはどんな役割を果たしているのだろうか？と考えました。他にもビーズのクッションカバー、バッグ、絵画などもあったので、きっとアイデンティティの表現やおしゃれ、思い出をそばで身に着けるといった意味があるのだろうと考えました。

一つ印象的だったのは、リュックのように背負い、何かを入れて運ぶ「背負い運搬具」にビーズが用いられていたことです。これを見た時には、荷物の入れ物をかえって重くしているのではないか、用途としてビーズは適切に使われていないのではないかとも考えました。おしゃれに機能性を取り入れたマリー・クワントとは対照的に、おしゃれやアイデンティティなどのために機能性を損なってでも、ビーズは用いられているように思えました。これらの表現についての考え方の違いを二つの美術展を通して知ることができました。人の表現の違いは面白く、表現の文化についてさらに研究してみたいと思いました。

卒業論文・口頭試問を終えて

比較文化学科では四年間の勉強の集大成は卒業論文です。３年生の終り頃の「卒論構想発表会」、４年生秋学期10月の「卒論中間報告会」、12月半ばの卒論提出、２月初めの「卒論口頭試問」という段取りで卒業論文を完成させていきます。今年度も多くの学生が良い卒論を書いてくれました。その中から、２人に卒論執筆の感想を語ってもらいました。

（本学科教員　鄧　捷）

４年　高木優衣

私は所属するゼミナールにおいて、中国の歴史や文化について研究していました。ゼミナールでは中国の民族や漢文などについて学び、中国の歴史や文化について深掘りしました。私はゼミナールで学ぶ中で、中国の家族観とはどのようなものか疑問を持つようになりました。そして、卒業論文の大きなテーマを中国の家族観にしようと決めました。テーマが決まってから、私は卒業論文をより良いものにしたかったため、３年生からテーマについて追求していきました。具体的には、構想を考えることや各章の内容について研究することです。また、毎週のゼミナールまでに書く部分を決めることによって、完成まで近づいている感じがし、だんだん不安から楽しみに変わっていきました。

早い段階から活動することで、自分の理想とする卒業論文ができるようになると思います。また、卒論構想発表会や卒論中間報告会もスムーズに行うことができました。そして、12月半ばの卒論提出も焦ることなく細部までこだわることができ、２月の卒論口頭試問に望むことができました。口頭試問では準備しておいたことを無事伝えることができ、大学で良い思い出を作ることができました。初めは悩むことも多かったですが、ゼミナールの先生に質問すること、書籍を沢山読むことなどテーマに対して一生懸命になることができれば、よりよい卒業論文を作ることができると思いました。

卒業論文と聞くと、耳が痛くなるかもしれませんが、早い段階から取り組むことにより楽しんで活動することができました。皆さんもぜひチャレンジしてみてください。

４年　リュウ　ケイズイ

私が所属する伊藤健人ゼミでは、日本語そのものについて、生活の中から疑問に思ったこと、関心を持ったことなどをよくみんなで話し合っていました。私は、普段会話でよく使われている「あのー」「なんか」のようなフィラー表現が対人関係にも何らかの関わりがあることに気づき、このような表現の使い分けは何か、という疑問から「依頼に対する断り場面における「あの（ー）」「なんか」「ええと」の機能について」というテーマで卒業論文を書きました。言語コーパスを使って会話データを集め、「あの（ー）」「なんか」「ええと」の使用実態を考察し、研究の目的をほぼ達成することができたと思います。また、先行文献を読んだ上で、自分の考察対象についてより理解するための足がかりを得ました。

卒業論文執筆中に大変だと思ったことは、会話データをきちんと理解し、それに対する考えを自分の言葉でわかりやすく説明することです。卒論で初めて知るところとなったことも多く、論文執筆に慣れていない私にとっては、自分の考えを書き進めることにも時間がかかりました。しかしながら、卒業論文は、自分でテーマを決め、そこで掲げた問題を自分で深く考えて、自分の考えを書き残す私にとって初めての大きな機会であるため、それを大切にして論文に真剣に取り組んでいきたいと思うようになりました。

この卒業論文は、３年生の終わり頃から構想され、「卒論構想発表会」、「卒論中間報告会」、卒論提出、「卒論口頭試問」の段取りを経て、ほぼ４年生の１年間を通じて私と一緒に過ごしました。各段階で、伊藤先生をはじめ比較文化学科の先生方に自分がまだはっきりしていない論文の問題点などについて、有益な指摘とアドバイスをいただきました。様々な視点からの指摘とアドバイスがあったからこそ、この論文について考え続け、改善させることができました。心より感謝しております。

最後に、卒業論文は書き終えましたが、論文の出来は満足にはほど遠いものです。これからは、論文執筆を通して得られた経験を生かして、大学院の修士課程で現在の研究を深めていきたいと考えています。

就職活動をふり返って

４年：**江﨑　里香**
就職先：**自動車関連サービス総合職**

３年生になり、就活を始めなければと思いつつも何から始めればよいか分かりませんでした。そんな時、KGUインターンシップという科目があり、就活サイトの方にインターンや就活マナーについて教えていただき、就活の一歩を踏み出すことができました。私はバイクや自動車に興味があったことと、自宅から通える勤務地がよかったため、その二つを中心として、まずはインターンを探し始めました。自動車業界や地元の海運、運送業界のインターンを夏・冬と受け続け、年が明けると早期選考が始まりました。インターンに参加し、選考のステップやアドバイスなども頂いていたため、まずは早めに内定を貰い、その後様々な企業を見ていこうと考えていました。しかし、いざ、選考が進んでいくと、書類選考は通るものの面接がうまくいかず、インターンを受けた企業の持ち駒は、減っていきました。そこで焦り、片っ端から説明会を受ける日々が始まり、気づけば、内定を貰えればどこでもいいやという気持ちになっていました。心身ともに体調を崩してしまい、残っていた第一志望の企業を悔いが残らないように尽くすと決めました。そして、やっとその企業に内定をいただくことができました。

私が思う就活のポイントは、周りに流されず、自分のペースで就活を進めることです。周りの友人の進行状況もそうですが、SNSや就活サイトは、焦燥感を駆り立て、不安を募らせるだけでした。そのため、SNSはあえて見ないようにし、ひたすら面接練習に励みました。これから就活を迎える方も自分のペースで無理なく進めて、悔いのない就活にしてください。

大学院進学に至るまで

４年　LU LI

私は留学生として2017年に来日し、多くの来日留学生と同様に語学学校を経て、2019年４月に大学に入学して大学生活を始めました。しかし二年生の時、新型コロナウイルスはまるでブラックスワンのように歴史の舞台の上に突然として現れ、私たちの大学生活を含むすべてを包み込んでしまいました。大学に入ってから立てた目標や計画は現実の状況に打ち破られ、オンライン授業、緊急事態、マスク、ソーシャルディスタンスなど、日常から非日常に突入しました。そんな中、私は大学院に進学することを選びました。

私はかつて、「なぜ大学院に入るのか？これからは仕事なのか、進学なのか？自分はどう選べばいいのか？」と自問自答していました。その後、自分の考えを家族や先生、友人に相談し、自分の将来の計画と合わせて検討しました。それで自分の考えがいっそう明瞭になり、大学院進学は社会人になりたくない言い訳ではなく、自分が目標を明確に持ち、十分なモチベーションがあるからこその選択だということで確信を持ちました。こうして大学院を受験する決心がつきました。

私は日中文化の比較に興味を持っていますし、将来的に日本語教師の資格を取得して帰国したいとも考えています。そこで浮かんだ研究課題は「現代中国語における日本語借用語」です。この課題でまず卒業論文を書きました。そして、大学院でもいっそうそれを深く追求し、同時に日本語教師の資格も取りたいと考えました。大学院受験は紆余曲折がありましたが、自分のやりたいこと、研究の方向性や取得したい資格について迷いがありませんでした。

大学院を受験するかどうかを決めるには、今後の自分の目標と計画をしっかりと理解しなければなりません。それはけっして就職活動を遅らせるための逃げではなく、自分の積極的な将来展望であります。

卒論構想発表会参加記

2023年２月18日(土)に３年生を対象とする卒業論文構想発表会をZoomで実施しました。これから卒業論文を執筆する３年生が現時点での構想を発表し、先生方や他の学生から質問・コメントを受けて研究の糧とするためです。今年は、最終的に有志23人が発表しました。ここでは、この発表会に司会補助として参加してくれた４人の２年生に、会の様子や感想を聞いてみました。　　（本学科教員　小滝　陽）

２年　梶川　凌

私は今回上級生達がそれぞれの卒業論文の構想の概要を発表し合う、卒論構想発表会という場に司会補助という形で参加させていただいた。誰の発表を聞いていても、参加者らの持つ知識量や視野の広さが見て取れる、しっかりと練られた構想であり、質疑応答もそれぞれ質の高い議論がされていたことから“流石は先輩達だ”と、感銘を受けるような場面が多くあった。テーマの他にも含める内容の決め方、広げ方、絞り方など自分が今後論文を書く際に意識するべきことを見つけ出せたと思う。

しかしながらその質の高い質疑応答は、司会を務めていた教員が名指しで発言をうながすまでは始まらなかった。現実世界の会議室ではなくZoomミーティング上で開催されていたことや、馴染みのないメンバーや研究テーマが相手であったことも影響していたのだろう。積極的な質疑応答がなされていれば、さらに有意義な会になったのではないかと、その点はやや残念に思った。

２年　高松　翼

卒論構想発表会の３年生の構想を聞いて、私は来年までにここまで仕上げないといけないんだという、プレッシャーを感じました。しかし、それだけでなく見出しの作り方や、参考文献との関連づけ方などを発表会から学びました。私の担当したグループの発表は、私が実際にゼミで学んでいるアメリカのことが多かったため、自分自身で考えている卒論のこととともマッチすることが多く、ゼミ連で司会補助という役割でしたが、自分の卒論構想の勉強にもなりました。当日、Zoomの部屋に入るまで緊張していましたが、髙井先生に不慣れな私をサポートしていただきとても円滑に発表会を進められて、よかったです。これから３年生になり、ゼミナールでの研究や友人との意見交換など卒業論文に取り組む時間が増えていくと思うのですが、気負わず取り組もうと思うことができました。

２年　高梨　百桃

私が参加させてもらったＣグループは菅野先生、伊藤先生のゼミの先輩方の発表でした。私は卒論についてほとんど知識がなくどのようなことを書くのか分からなかったのですが、先輩方の発表を聞いてゼミナールの授業の中で自分が興味を持っていることを細かく絞って卒論を構想していくことが重要だとよく分かりました。大まかなテーマは同じでも、細かい視点が違っていたり、日常生活の中で気になったテーマを授業で学んだことと関連させたりしていて、私が想像しているよりもテーマは自由に決められるのかもしれないと感じました。

どの先輩の発表もしっかりと１つのテーマに絞り、それに合わせた文献や自身での調査を通して考察、結論を出す流れがほぼ完成されていて、完成した論文を読んでみたいと思います。私もそろそろ卒論についてどのテーマで書くか考えていたところだったので、今回の発表会は良い情報を沢山吸収することができる貴重な体験でした。

２年　畠山　真優

２月18日に行われた卒論構想発表会に参加し、日本の歴史・日本語、キリスト教などを中心に様々な卒論アイディアを聞くことができ、私自身が卒論を書く側になった時の勉強になりました。

卒論のテーマは自由とされていますが、私は自由だからこそテーマを決めることが難しいと思っています。そのため、今回の卒論構想発表会で先輩方が考えた卒論テーマは、どのような方法で選んだのか気になりました。発表後の質問タイムで、多くの先輩方がそのテーマを選んだ理由を尋ねられ、「将来の夢から」「今まで研究してきたこととリンクさせた」「ある作品からその人物について深く知りたい」などどれも参考になる答えばかりでした。

ゼミが始まって１年が経ち、これから私たちも卒論の準備を進めていかなければならないため、今回の卒論構想発表会で教えていただいたアイディアを取り入れ、先輩方のように計画的に準備をしていきたいと思います。

国際交流プログラム

中国の古都・洛陽　オンラインツアー

本学科教員　菅野　恵美

国際文化学部では、国際交流プログラムとして「中国の古都・洛陽　オンラインツアー」を開催しました。洛陽は西の古都・西安と並んで、歴代王朝の首都となってきた古都です。

オンラインツアーは二度にわたり、第１回は「**古跡を訪ねる：龍門石窟**」（2023/１/20）と題し、世界遺産である「龍門石窟」を見て回りました。第２回は「**地方の町散歩：天子駕六博物館から繁華街へ**」（2023/１/24）と題し、洛陽中心部で発掘された古代の車馬遺跡を博物館で見学し、それから春節を迎えた繁華街を見て歩きました。

ツアーはオンラインで中継され、現地のガイドさんの案内のもと、参加者は質問をしながら龍門石窟の雄大さを実感し、現代的な洛陽の賑わいを楽しみました。

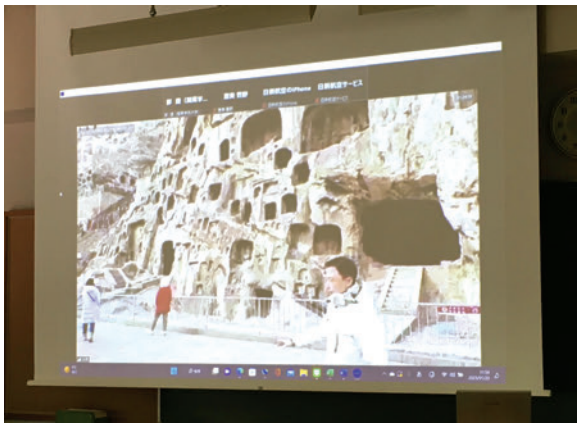
以下、龍門石窟を参観した学生のコメントを紹介します。

「石窟の多さにはとても驚き、一千年以上経過しているにも関わらず、原型をとどめているものが多く残っていることにも驚きました。」

「今まで石窟寺院という存在を知ってはいたが、どのようなものなのかをあまり理解していなかった。しかし今回のツアーで入り口から案内していただいたことで、その規模を含めて圧倒させられた。」

「中国に行った際は洛陽の歴史的遺跡をメインに観光してみたい。」

以上のように、オンラインでも迫力は伝わったようです。また、洛陽にも親近感が湧いたようです。龍門の観光地の賑わいと落ち着きのある様を見て、好感をもったことがコメントから窺えました。



比較文化学科通信 Vol.36　2023年3月20日発行
編　集：関東学院大学国際文化学部比較文化学科
編集協力：関東学院大学国際文化学部比較文化学科ゼミナール連合会
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1　TEL:045(786)7056　URL:http://kokusai.kanto-gakuin.ac.jp/
印刷所：株式会社なまためプリント　〒231-0006 横浜市中区南仲通4-43馬車道大津ビル　TEL:045(641)8080